

ブルシャスキー語の名詞修飾と名詞化

吉岡 乾 (国立民族学博物館/NINJAL 共同研究員)

0. ブルシャスキー語について

系統的孤立語であるブルシャスキー語は、パキスタンのギルギット・バルティスタン州フンザ谷下流域、ナゲル谷、ヤスィン谷と、インドのジャンムー・カシミール州スリナガル市ボタ・ラージ居住区で、10万人ほどのブルショ人、その他の人々によって話されている、膠着的性質の強い、SV/AOV型の、能格言語である。地理的に見れば南アジアの北端、周囲は西アジア東端、中央アジア南端、シナ・チベット西端の折衝地点といったところ。形容詞は名詞的で、副詞と言う語クラスを立てる文法的理由のない言語である。

本発表での例文は特記がなければ発表者の現地調査によるものであり、先行研究からの例の表記法は元のままである。

1. 実詞 (名詞類・形容詞類) による名詞修飾

1.1. 名詞類 (名詞・代名詞) による名詞修飾

名詞類で名詞を修飾する場合には、基本的には属格標識が修飾語に付される。属格標識は、ヒト女性 (HF) クラス名詞類がホストの場合には *-mo*、それ以外のクラスの場合には *-e* である: (1)。

(1) a.	<i>béege</i>	<i>ha</i>	b.	<i>ínmo</i>	<i>mobaíl</i>
	<i>béeg-e</i>	<i>ha</i>		<i>ín-mo</i>	<i>mobaíl</i>
	PN-GEN	家		彼/女.DIST-GEN.HF	携帯電話
	「ベークの家」			「彼女の携帯電話」	

譲渡不能所有の場合には、被所有物が必ず人称接頭辞を必要とする。人称接頭辞は人称・数・クラスで一致し、譲渡不能所有の所有者、感情形容詞の感情主、動詞の受動者 (undergoer) を標示する。更に人称接頭辞には、母音の広さ・長さによる3タイプの区別があるが、名詞に付く場合には語彙的に決まっていて、タイプの異なりが何等かの機能を果たしているとは言い難いので、本発表では存在のみを述べておく (グロスに I/II/III とあるのは、タイプ番号である)。ブルシャスキー語の譲渡不能名詞は、大きく言って、身体部位、親族名称: (2a)、感情名詞、相対位置名詞: (2b)、といったグループに分けられる。

(2) a.	<i>béege</i>	<i>éço</i>	b.	<i>ínmo</i>	<i>múlji</i>
	<i>béeg-e</i>	<i>i-ço</i>		<i>ín-mo</i>	<i>mu-ljí</i>
	PN-GEN	3SG.HM:I-同性兄弟		彼/女.DIST-GEN.HF	3SG.HF:I-後ろ
	「ベークの兄弟」			「彼女の後ろ」	

時折、属格を伴わない名詞の並置によって、修飾している事例もある：(3)。この場合、前の名詞が形容詞的に用いられているのだと判断できる。頻繁にあるわけではないが、例を探せば次々に見付かる程度にはある。

- (3) a. *gírí haldén* b. *mamú báalt*
 gírí haldén *mamú báalt*
 アイベクス 1歳以上の牡ヤギ 乳 林檎
 「牡アイベクス」 「林檎の一品種」

明らかに修飾関係にない (dvandva 的な) 名詞の並置もあり、その場合にも格接辞が後部要素にしか付かなかつたりもするので、そもそもブルシヤスキー語では、複合語が必ずしも音韻的に一語にならない、と考えるべきかも知れない。(すると、非属格名詞+名詞の並置は全て複合なのか? 基準は? という、記述上の別の面倒臭さが生じるが)

- (4) a. *har buácum* b. *guúy gúmimo*
 har buá-c-m *gu-uy gu-mí-mo*
 去勢牛 牝牛-ADE-ABL 2SG:I-父 2SG:I-母-GEN.HF
 「畜牛から」 「君の両親の」

1.2. 形容詞類 (形容詞・数詞) による名詞修飾

形容詞類は属格を取らずに名詞を修飾する語クラスである。修飾語は被修飾語に前置される。

- (5) a. *tháanum ha* b. *šúá mobaíl* c. *matúm biránc*
 tháan-m ha *šúá mobaíl* *mat-m biránc*
 高い-ADJVLZ 家 良い 携帯電話 黒い-ADJVLZ 桑
 「高い家」 「良い携帯電話」 「黒い桑」

指示対象が複数の場合は、形容詞によっては複数接尾辞を取る。名詞クラスに合わせて別々の複数接尾辞を持っている形容詞もある。

- (6) a. *tháaiko hakíčañ* b. *šúá mobaílišo* c. *matúmišo biránc*
 tháan- ha-kíčañ *šúá mobaíl-išo* *mat-m-išo biránc*
 ko
 高い-PL 家-PL 良い 携帯電話-PL 黒い-ADJVLZ-PL.X 桑
 「高い家:PL」 「良い携帯電話:PL」 「黒い桑 (の実):PL」

指示形容詞、数詞は、一般形容詞に先行することが多い。但し、厳密に決まっているわけではない。

- (7) a. *gucé uskó jótı̄šo urkái* b. *isé han šuá mobaíl*
gucé uskó jóṭ-išo urk-ái isé hán šuá mobaíl
 これらの.X 三.X 小さい-PL.X 狼-PL その.X 一.XY 良い 携帯電話
 「これら三匹の小さな狼たち」 「その一つの良い携帯電話」

2. 動詞類による2つの名詞修飾表現

ブルシャスキー語における、動詞類による名詞修飾表現は、大きく2つに分けられる。1つは、動詞類を非定形(完了分詞や不定詞)にし、被修飾名詞類に前置して、Comrie (1981) 分類で言う、gap strategy で修飾する、「非定形-名詞修飾」。もう1つは、疑問詞を関係詞として用い、汎用接続詞を挟んだり挟まなかったりしつつ非修飾名詞類に前置して relative-pronoun strategy (或いは、non-reduction strategy) で修飾する、「関係-名詞修飾」である。

2.1. 構造的な異なり

それぞれの名詞修飾構造の作りかたを、以下の例文(8)をベースにして、簡潔に説明する。

- (8) *sabuúr jáa áie qhat girmínumo*
sabuúr jáa ạ-i-e qhát girmín-m-o
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 手紙 書く-NPRS-3SG.HF
 「昨日、私の娘が手紙を書いた」

非定形-名詞修飾は、完了分詞を用いるものと、不定詞を用いるものがあり、構造的には同じだが、アスペクトの側面で区別がされている:(9)。即ち、前者が完了アスペクト、後者が未完了アスペクトの名詞修飾に用いられるものである。

- (9) a. *sabuúr jáa áie ∅ girmínum (ité) qhat*
[sabuúr jáa ạ-i-e girmín]-m ité qhát
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 書く-ADJVLZ その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘が書いた]手紙」
- b. *jáa áie ∅ girmínas (ité) qhat*
[jáa ạ-i-e girmín]-as ité qhát
 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 書く-INF その.Y 手紙
 「[私の娘が書く/書いている]手紙」

非定形-名詞修飾は gap strategy であるため、(9)の例文は a.も b.も、被修飾語 *qhat* 「手紙」が元の文で占めていた位置は、空所(∅)になっている。名詞修飾節と被修飾語との間の指示形容詞(ここでは「手紙」が抽象物(Y)クラス名詞なので、*ité*)は、省略可能であるが、挿入されることのほうが多い。

猶、ブルシャスキー語でもガノ交替は起こせる：(9)′。勿論、意味的な異なりも伴わない。但し、ヒト女性を除いて、能格と属格のどちらにも *-e* という標識を用いるため、実際に交替しているかどうかを判別できる状況は少ない。

(9)′ a. *sabuúr jáa áimo* \emptyset *girmínum (ité) qhat*
 [sabuúr jáa a-i-mo girmín]-m ité qhát
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-GEN.HF 書く-ADJVLZ その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘の書いた]手紙」

b. *jáa áimo* \emptyset *girmínas (ité) qhat*
 [jáa a-i-mo girmín]-as ité qhát
 私:GEN 1SG:II-娘-GEN.HF 書く-INF その.Y 手紙
 「[私の娘の書く／書いている]手紙」

一方で、関係-名詞修飾のほうは、*relative-pronoun strategy* を用いている：(10)。関係節内では勿論、動詞類は定形のままである。法の変化などもない。

(10) *sabuúr jáa áie* *bésan girmínumo (ke)*
 [sabuúr jáa a-i-e bés-an girmín-m-o ke]
 昨日 私:GEN 1SG:II-娘-ERG 何-INDF.SG 書く-NPRS-3SG.HF CONJN
 (ité) qhat
 ité qhát
 その.Y 手紙
 「[昨日、私の娘が書いた]手紙」 (lit. 「昨日、私の娘が何を書いたその手紙」)

ここでは、被修飾語 *qhat* 「手紙」が元の文で占めていた位置に、*bésan* 「何を」という関係詞が用いられている。ヒンディー・ウルドゥー語、マラーティー語、スィンディー語で共通の *jō* のような関係詞専用の語彙は、ブルシャスキー語にはない。汎用接続詞の *ke*、指示形容詞の *ité* 「その」は、どちらも省略可能であるが、やはり省略されないことが多い。

ちなみに、ブルシャスキー語の名詞修飾表現は、日本語に似て、代名詞を修飾することも可能である：(11b)。(※ *Accessibility hierarchy* 的に、余り右に行くことができなくなるんじゃないかとも感じるが、発表者の肌感覚であり、今後の現地調査が必要であろう。) 形容詞が代名詞を修飾するのは、1、2 人称では聞き覚えがない。数詞の場合は、少数の場合には人称接頭辞を伴った数名詞、例えば *@-iskén*⁺ 「三人、三者」 < 数詞 *iskén, uskó, iski* 「三つ.H/XY/Z」など、が用意されているので、人称代名詞を数詞で修飾することはなさそうである。(「@」は受動者人称接頭辞スロットを表す)

- (11) a. *sabuúr jáa qhat girmínam*
sabuúr jáa qhát girmín-a-m
 昨日 私:ERG 手紙 書く-1SG-NPRS
 「昨日、私が手紙を書いた」
- b. *sabuúr ∅ qhat girmínam je*
 [sabuúr qhát girmín-a]-m jé
 昨日 手紙 書く-1SG-ADJVLZ 私
 「[昨日、手紙を書いた]私」

完了相では、1人称単数の主語人称接尾辞のみ、形容詞化（分詞化）接尾辞や非現在接尾辞の前に付加されるので、完了分詞も1人称単数でのみ主語で人称変化する。

2.2. 機能的な異なり

機能的な側面から言えば、非定形-名詞修飾構造と、関係-名詞修飾構造との間には、2点の異なりがある。1つめは accessibility hierarchy 上の使用可能域の異なりであり、2つめは外の関係の名詞を修飾できるか否かである。

2.2.1. Accessibility hierarchy とブルシャスキー語の名詞修飾表現

項の身分によって、関係化できる範囲が異なり、それは階層的である。言い換えれば、ある名詞修飾構造で修飾できる底の名詞の、元の文での身分というものが、階層構造になっている。というのが、accessibility hierarchy の意味するところであるだろう。この研究会では何回目かも分からない再確認となるが、その階層は、(12)の通りである。

(12) Noun Phrase Accessibility Hierarchy (Keenan & Comrie 1977)

主語 > 直接目的語 > 間接目的語 > 斜格目的語 > 所有主 > 比較対象

この階層に合わせて調べた結果、ブルシャスキー語の2種の名詞修飾構造のカバーする範囲は、次の表1のようであった。

表1：ブルシャスキー語の名詞修飾構造の使用可能範囲

NME\AH	主語	直接目的語	間接目的語	斜格目的語	所有主	比較対象
非定形-構造	○	○	○	○	○	×
関係-構造	○	○	○	○	○	○

非定形-名詞修飾構造は比較対象項を修飾できない一方で、関係-名詞修飾構造は全ての内の関係項を修飾可能である。以下、その可否の境界線を引く時の、「所有主」と「比較対象」とのそれぞれ例文を示す。(13a)は「元の文」、(13b)が非定形-名詞修飾、(13c)が関係-名詞

修飾の例である。

- (13) a. *iné síse kamerá qharáap maními.*
 iné sís-e kamerá qharáap man-m-i
 その.H 人-GEN カメラ 悪い なる-NPRS-3SG.Y
 「その人のカメラは壊れた。」
- b. *kamerá qharáap manúum iné sí*
 [kamerá qharáap man]-m iné sí
 カメラ 悪い なる-ADJVLZ その.H 人
- c. *ámine kamerá qharáap maními ke iné sí*
 [ámin-e kamerá qharáap man-m-i ke] iné sí
 どの.H-GEN カメラ 悪い なる-NPRS-3SG.Y CONJN その.H 人
 「[カメラが壊れた]その人」

(13b、c)のどちらもが、文法的であるとインフォーマントに判断されたので、ブルシャスキー一語ではいずれの名詞修飾表現もが、所有者を底の名詞に取れるのであろう。

次に、下の例文を見て頂きたい。これらは「比較対象」項を修飾対象として外に出す実験の結果である。(14a)が「元の文」、(14b)が非定形-名詞修飾（非文判断されたもの）、(14c)が関係-名詞修飾の例となっている。

- (14) a. *isé húkcum buš yar gáaršibí.*
 isé huk-c-m buš i-yar gáarc-č+b-i-Ø
 その.X 犬-ADE-ABL 猫 3SG.X:I-前 走る-IPFV+COP-3SG.X-PRS
 「その犬よりも猫が早く走っている。」
- b. * *buš yar gáarcas isé huk*
 [buš i-yar gáarc]- isé huk
 as
 猫 3SG.X:I-前 走る-INF その.X 犬
- c. *ámiscum buš yar gáaršibí ke*
 [ámis-c-m buš i-yar gáarc-č+b-i-Ø ke]
 どの.X-ADE-ABL 猫 3SG.X:I-前 走る-IPFV+COP-3SG.X-PRS CONJN
isé huk
isé huk
 その.X 犬
 「[猫が速く走っている]その犬」

るのと並行的であるだろう：(3)・(17)。

- (17) a. *tháanumcum* *tháanum* *ha* 「高いのより高い家」
 tháan-m-c-m *tháan-m* *ha* (= 「最も高い家」)
 高い-ADJVLZ-ADE-ABL 高い-ADJVLZ 家
- b. *matúm* *jáa* *bilá* 「黒いのが私のだ」
 mat-m *jáa* *b-ilá-∅*
 黒い-ADJVLZ 私:GEN COP-3SG.Y-PRS

ここで触れていない非定形動詞には、未完了分詞、「希求法定詞」、「接続分詞」などがある。

未完了分詞 [V-č-m] は常に格標識を伴って、種々の副動詞として用いられる。

一つ飛ばして「接続分詞」[n-V-n⁰⁻⁴] とは、南アジアの言語記述でしばしば見られる用語であるが、ブルシャスキー語の場合は narrative 副動詞として用いられる形式である。

そんな中、ブルシャスキー語研究初期の文法書 Lorimer (1935a) から連綿と「希求法定詞」[V-š] と呼ばれてきている形式がある。これは、希求法定形動詞の人称接尾辞が付いていない形式であるが、「不定詞」の名の通り、名詞修飾に用いていた不定詞と一部、互換可能な場面に登場したりもする、名詞的な形式である。動詞から作られる「希求法定詞」の用途は、以下の3つである：(A) 可能動詞 @*man-*「できる」の補部になる：例文 (18)；(B) 限界を表す時空間名詞 *qháa(š(ij))*「まで」の補部になる：例文 (19)；(C) 一部の動詞に関しては化石化した(?)派生名詞を持つ：表 2。(A、B)は規則的に全ての動詞で見られるし、どちらも一般不定詞 [V-as] と互換的に用いられる。

- (18) *mímar* *káman* *íit* *miúš*
 mí-RDP-ar *kám-an* *íit* *mi-u'š*
 私達-OBL-DAT 少し-INDF.SG 煉瓦 1PL:I-与える.HX.OBJ-OPT

máamaibáana?

má-man'č+bá-an-∅=a

2PL:III-なる-IPFV-2PL-PRS=Q

「煉瓦を少し分けて下さいますか (lit. 与えられますか)。」 (*uskójótišo urkái: #4*)

- (19) *baadšáa ké zizí yáníš atíaš qháa síndacar*
baadšáa ke zizí yéniš a-d-e'š qháaš sínda-c-ar
 王 CONJN 母 女王 NEG-TEL-起きる-OPT まで 川-ADE-DAT
- náan čúmo dúcuninin*
n-a'n čúmo d-u-sú-n-n-n
 行く:CP-1SG-CP 魚 TEL:CP-3PL.X:I-運ぶ-CP-CP-CP
- 「私は、王と王妃が目覚める前に川へ行き、魚を捕まえて」 (*čúmoe minás: #38*)

表 2：希求法接尾辞 -š 派生が由来と思われる一般名詞 (語彙集 Berger 1998c より収集)

<i>barén-ç</i>	視線	<	<i>barén-</i>	見る
<i>yas-iš</i>	笑い	<	<i>yas-</i>	笑う
<i>yurá-š</i>	大便	<	<i>yurá-</i>	排便する
<i>hará-š</i>	小便	<	<i>hará-</i>	排尿する
<i>hér-š</i>	泣き	<	<i>hér-</i>	泣く
<i>maltá-š</i>	バター	<	<i>maltár-</i>	饗する
<i>bisár-š</i>	鎌	<	<i>bisárk-</i>	刈る、切る
<i>gámi-š</i>	賃金	<	<i>gámi-</i>	支払う

多少の取りこぼしはあるかも知れないが、この表 2 に挙げているのが、最大の語彙集で見付けられた「希求法不定詞」っぽい形の項目である。どれも、日常的に用いられている語彙であるが、元の動詞の意味に、どういう意味機能を加算して名詞化しているのか、一律で説明しようとするのが悩ましい。どなたか、良いアイデアがあったら助言して欲しい。二律で良ければ、「産出されるもの」(上 6 つ)と「媒介するもの」(下 2 つ) 辺りだろうか。

だが、何故そういった名詞を派生している接辞が、希求法標識になっているのかは考えて分かることかどうか分からない「産出するもの」が、詰まり「これから動作をする」という含みで、非実現 (irrealis) な動名詞を表しているのだろうか。確かに、可能性 (A) を述べるのも、達成限界 (B) を述べるのも、未然の出来事ではあるが。

加えての疑問としては、一般不定詞や完了分詞がガノ交替を起こす (例文(20a)) のに対し、(A)、(B) の用法での「希求法不定詞」はガノ交替ができない (例文(20b)) という非対称性である。これに関しては、納得の行く説明が思い浮かばない。接尾辞 -š が名詞化接辞由来だとしたら、却って交替できて欲しいところである。希求法標識という動詞の活用接辞から、名詞化の用途が派生して出て来た、という方向性で考えないとならないだろうか。

- (20) a. *áie / áimo* *íí* *ésqanas* *qháa*
 a-i-e / a-i-mo i-i i-s-yan-aş qháaş
 1SG:II-娘-ERG/-GEN.HF 1SG:I-息子 3SG.HM:II-CAUS-終わる-INF まで
 「私の娘 {が/の} 私の息子を殺すまでに」
- b. *áie / *áimo* *íí* *ésqanş* *qháa*
 a-i-e / *a-i-mo i-i i-s-yan-ş qháaş
 1SG:II-娘-ERG/*-GEN.HF 1SG:I-息子 3SG.HM:II-CAUS-終わる-OPT まで
 「私の娘 {が/*の} 私の息子を殺すまでに」

3.2. 名詞修飾できない名詞化形容詞

更に話は飛んで、もう動詞類による名詞修飾表現とは随分と遠い話題になってしまうが、今回の発表のネタや構成を練り始めてから、形容詞の用法とそれにまつわる疑問が浮かんだので、便乗してここで取り上げさせて貰いたい。具体的に何の話かと言えば、名詞類に用いられる不定接尾辞（単数 *-an*、複数 *-ik*）が形容詞に付加された場合に、どういう働きをしているのか、名詞化として機能しているのではないか、ということを改めて考えたいのである。が、紙幅と体調と準備時間の都合上、この先しっかりと文章化する余裕がなさそうなので、思考のポイントと例文だけ列挙しておきたい。発表の場で時間があったら、その場で丁寧に話したい。時間がなかったら、もっと考えてから、別の機会を探します。

- 統計的にしっかりと調べられてはいないのだが、限定用法の時（名詞の前にある時）より、叙述用法の時（述部補語の時）のほうが、不定単数接尾辞 *-an* を付与されている
- 但し、*kam* 「少しの」、*but* 「多くの」という数量形容詞は、限定用法でも不定単数接尾辞 *-an* を伴っていることが多々ある。数詞も間々
- 疑問詞 *bésan/bésik* 「何」は殆ど常に不定接尾辞を伴っている。項であることが多いが、形容詞的に名詞に前置されることもある
- 副詞のないブルシャスキー語は、裸の名詞や形容詞が副詞的（連用的）用法を持つ



- 不定単数接尾辞 *-an* を伴った形容詞・疑問詞は、「修飾できない名詞化」をしていて、修飾しているように見える場合も、後続名詞と同格、或いは、副詞的に機能しているのではないか？
- 不定冠詞（或いはそれに類するもの）が形容詞を「名詞化」するのは一般的か？



- 名詞を修飾できる（様に見える）名詞とできない名詞とは、同じ品詞として良いのか？
- 不定詞・完了分詞と「希求法不定詞」とは、同様に動詞の名詞化と言って良いのか？

(21)は、一般名詞項が存在文で不定単数接尾辞を伴っている事例。ブルシャスキー語の存在コピュラ文は、項が主語位置か補語位置か判別できない。

(21)	<i>hin</i>	<i>baadśáan</i>	<i>bam.</i>
	<i>hín</i>	<i>baadśáa-an</i>	<i>bá-i-m</i>
	一.H	王-INDF.SG	COP-3SG.HM-NPRS

「1人の王が居た。」(Tikkanen 1991, *Frog as a bride*: #1)

一方で、(22)では、コピュラ文(順に措定、指定、措定)補語の位置で、同接尾辞が形容詞や名詞と共に用いられている例である。

(22)	<i>in</i>	<i>dimáaye</i>	<i>buṭ</i>	<i>uśáaran</i>	<i>bái.</i>	<i>waazíire</i>
	<i>ín</i>	<i>dimáay-e</i>	<i>búṭ</i>	<i>uśáar-an</i>	<i>bá-i-∅</i>	<i>wazír-e</i>
	彼/女.DIST	脳-GEN	多い	賢い-INDF.SG	COP-3SG.HM-PRS	大臣-GEN

<i>íían</i>	<i>bái.</i>	<i>buṭ</i>	<i>duúrginum</i>	<i>sísan</i>
<i>í-í-an</i>	<i>bá-i-∅</i>	<i>búṭ</i>	<i>d-gurgín-m</i>	<i>sís-an</i>
3SG.HM:I-息子-INDF.SG	COP-3SG.HM-PRS	多い	TEL-挽く-ADJVLZ	人-INDF.SG

bái.

bá-i-∅

COP-3SG.HM-PRS

「彼はとても頭が冴えている。大臣の息子だ。とても教養のある人だ。」(*čhúmoe minás*: #97)

動詞類の不定詞や完了分詞も、形容詞的に働くことがあるので、扱いは同じになる。(23)はコピュラの分詞+不定接尾辞、(24)の後文は動詞の不定詞+不定接尾辞の例である(前文は形容詞+不定接尾辞)。

(23)	<i>muyáte</i>	<i>barkát</i>	<i>apíman</i>	<i>bom</i>
	<i>mu-yát-e</i>	<i>barkát</i>	<i>a-b-i-m-an</i>	<i>bá-o-m</i>
	3SG.HF:I-上-ESS	祝福	NEG-COP-3SG.XY-ADJVLZ-INDF.SG	COP-3SG.HF-NPRS

aqhéer.

aqhéer

終わり

「彼女には祝福がなかった(祝福がない人だった)のだ、結局。」(*čhúmoe minás*: #197)

- (24) *un be guúmuskışan báa ke, guúmušo*
ún bé gu-umús-kiş-an bá-a-∅ ke gu-umús-čo
 君 どう 2SG:I-舌-ADJVLZ-INDF.SG COP-2SG-PRS CONJN 2SG:I-舌-PL

<i>yaráasan</i>	<i>báa.</i>
<i>yar-as-an</i>	<i>bá-a-∅</i>
鳴る-INF-INDF.SG	COP-2SG-PRS

「お前は何という嘘吐きだ！ 二枚舌で話す奴め！」 (*čhúmoe minás: #168*)

次に示すのは、数量詞が一見すると限定用法であるかのようなポジションで、不定接尾辞を伴っている例である。(25)は「少しの」、(26)は「多くの」、(27)・(28)は数詞の例である。これらを、修飾関係にあるのではなく、同格に置いているのだと見ることはできないのであろうか？ (どう判断すれば良い？ 同格位置の項が必ずしも同じ接尾辞を明示しなければならぬわけではなかったら、基準は立てられるのだろうか？)

- (25) *káman akhúroman bátiŋ su!*
kám-an akhúr-m-an bátiŋ sú-i
 少し-INDF.SG これ程-ADJVLZ-INDF.SG 打粉 運ぶ-IMP.SG

「ほんの僅かな打粉を持って来なさい。」 (*čhúmoe minás: #302*)

- (26) *iséé bútan báarčuko ke šikárkaro íŋ*
isé-e búŋ-an báard- ke šikárk-aro íŋ
 その.X-ERG 多い-INDF.SG 赤い-PL CONJN 黄色い-PL 煉瓦

icéer uúmi.

icé-ar u-u-m-i

それらの.X-DAT 3PL.X:I-与える.HX.OBJ-NPRS-3SG.X

「彼 (カンガルー) はたくさんの赤と黄色の煉瓦を彼ら (狼たち) に与えた。」

(*uskó jótišo urkái: #5*)

- (27) *altánan juwáay yar ne qhabár*
o
altán-an juáan-čo i-yár n-i-t qhabár
 二.H-INDF.SG 若い-PL 3SG.Y:I-前 CP-3SG.Y:II-する 報せ

dóócuman.

d+u+sú-m-an

送る-NPRS-3PL.H

「2人の若者が先に行ってニュースを伝えた。」(Tikkanen 1991, *Frog as a bride*: #171)

- | | | | | | | | |
|--------------|-----------------|---------------|--------------------|--|----------------|-----------------|---------------|
| (28) | <i>hin</i> | <i>híran</i> | <i>mapéerane</i> | <table border="1"><tr><td><i>iskén</i></td><td><i>wáltoan</i></td></tr></table> | <i>iskén</i> | <i>wáltoan</i> | <i>yuúa</i> |
| <i>iskén</i> | <i>wáltoan</i> | | | | | | |
| | <i>hín</i> | <i>hir-an</i> | <i>mapéer-an-e</i> | <table border="1"><tr><td><i>iskén</i></td><td><i>wálto-an</i></td></tr></table> | <i>iskén</i> | <i>wálto-an</i> | <i>i-i-ua</i> |
| <i>iskén</i> | <i>wálto-an</i> | | | | | | |
| | 一.H | 男-INDF.SG | 老いた-INDF.SG-GEN | 三.H 四.H-INDF.SG | 3SG.HM:I-息子-PL | | |

bam.

bá-an-m

COP-3PL.H-NPRS

「或る老人には3~4人の息子が居た。」(*čhúmoe minás*: #291)

次の2例は、疑問詞に不定接尾辞が付いている例である。(29)は「地震」と明らかに同格になっている。(30)のような用法では、「何の/どんなギフト」ではなく、「何かギフト」という意味合いになるので、「誰か男の人居る？」の「誰か」「男の人」が同格だとしたら、同格であると言えるであろう。ブルシャスキー語で絶対格標識がゼロなのが惜しい。

- | | | | | | | |
|-----------------|-----------|---|-----------------|----------------------|---------------|--------------|
| (29) | <i>et</i> | <table border="1"><tr><td><i>bésane</i></td></tr></table> | <i>bésane</i> | <i>zilziláane</i> | <i>bésan</i> | <i>čhóko</i> |
| <i>bésane</i> | | | | | | |
| | <i>ét</i> | <table border="1"><tr><td><i>bés-an-e</i></td></tr></table> | <i>bés-an-e</i> | <i>zilziláa-an-e</i> | <i>bés-an</i> | <i>čhók</i> |
| <i>bés-an-e</i> | | | | | | |
| | それ.Y | 何-INDF.SG-ERG | 地震-INDF.SG-ERG | 何-INDF.SG | 割り | |
| | | | | | o | |

éti bía.

i-t+b-i-Ø=a

3SG.X:II-する+COP-3SG.X-PRS=Q

「それを地震か何かが壊したか何かしたのか？」(*čhúmoe minás*: #93)

- | | | | | | | | |
|---------------|-----------------|------------|----------------|---|---------------|--------------|-------------|
| (30) | <i>góçoe</i> | <i>gar</i> | <i>ne</i> | <table border="1"><tr><td><i>bésan</i></td></tr></table> | <i>bésan</i> | <i>toofá</i> | <i>áar</i> |
| <i>bésan</i> | | | | | | | |
| | <i>gu'çoe</i> | <i>gar</i> | <i>n-i-t</i> | <table border="1"><tr><td><i>bés-an</i></td></tr></table> | <i>bés-an</i> | <i>toofá</i> | <i>a-ar</i> |
| <i>bés-an</i> | | | | | | | |
| | 2SG:II-同性兄弟-GEN | 結婚 | CP-3SG.Y:II-する | 何-INDF.SG | ギフト | 1SG:II-DAT | |

díšuma

d-i-sú-č-m-a

TEL-3SG.Y:I-運ぶ-IPFV-NPRS-2SG

sénas

sén-as

言う-INF

ke.

ke

CONJN

「『兄の結婚式をして、お前は私に何かプレゼントを持って来るのかね?』とは、彼の言で。」(*čhúmoe minás*: #268)

(31)は、裸の時空間名詞が副詞的に用いられている例である。そして、不定接尾辞が付いても、時空間名詞が副詞的に用いられるのが、(32)から分かる。

- (31)

<i>khúulto</i>
<i>khúulto</i>
今日

akhí daltás yéniše čhúmoan dáayurka báa.
akhíl daltás yéniš-e čhúmo-an d-a-γurk-a+bá-a-∅
 今 日 こう 美しい 金-GEN 魚-INDF.SG TEL-1SG:III-得る-1SG+COP-1SG-PRS
 「今日はこんなにも綺麗な金色の魚を獲りました。」 (*čhúmoe minás*: #17)

- (32) *nukúčan, qaríib*

<i>altáayuč</i>	<i>tóorimikučan</i>
<i>altám-kuc</i>	<i>tóorimi-kuc-an</i>
八-日	十-日-INDF.SG

hurútimi.
n-gučhá-n qaríib *altám-kuc* *tóorimi-kuc-an* *hurúṭ-m-i*
 CP-横たわる-CP 近い 八-日 十-日-INDF.SG 座る-NPRS-3SG.HM
 「横になって、約8~10日間、彼はそこに居た。」 (Tikkanen 1991, *Frog as a bride*: #386)

さて、同格と見做すこと、副詞的用法と見做すことで、形容詞類+不定接尾辞が(修飾機能のない)名詞化をしていると考えるのは難しいだろうか。そうでないとしたら、何をしているのだろうか。(これまでは、「強意」とか何とか、適当に言って放置されて来ている)

<略号 (LGRの標準略号にないもの)>

ADE	接格	H	ヒト クラス	TEL	完結 [telic]
ADJVLZ	形容詞化	HF	ヒト女性クラス	X	具象物クラス
CONJN	接続詞	HM	ヒト男性クラス	Y	抽象物クラス
CP	接続分詞	OPT	希求	Z	時空間クラス
ESS	地点格	PN	固有名詞		

<参考文献>

- Berger, Hermann. 1998. *Die Burushaski-Sprache von Hunza und Nager. Teil I: Grammatik* (1998a); *Teil II: Texte mit Übersetzungen* (1998b); *Teil III: Wörterbuch* (1998c). Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Comrie, Bernard. 1981. *Language Universality and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Oxford: Basil Blackwell.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie. 1977. Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry*, 8: 63-99.
- Lorimer, D. L. R. 1935-8. *The Burushaski Language. vol.I: Introduction and Grammar* (1935a); *vol.II: Texts and Translations* (1935b); *vol.III: Vocabularies and Index* (1938). Oslo: H.

Aschehoug & Co. (W. Nygaard).

Tikkanen, Bertil. 1991. A Burushaski Folktale, Transcribed and Translated: The Frog as a Bride, or, The Three Princes and the Fairy Princess Salaasír. *Studia Orientalia*, 67: 65–125.